

オレが幼少の砌（みぎり）家の近所で盆踊りがあった。大きい犬小屋ぐらいの祠が在り、年がら年中そこに祠が在るという事が日常生活で、道が在り、街路樹が在り、赤いポストが在り、木造の祠が在る、自分の中で普遍的な風景として静かに存在すると言うような小さな祠。それでもたまには花も飾ってあった、中に鎮座しているご主人様が地蔵さんなのか観音さんそれは記憶にないが、赤い着物か赤い前垂れか、赤い色を纏っていた事だけが妙に浮かんでくるが、考えてみれば何処に行っても何時見ても地蔵さんやら観音さんの着物や前垂れには赤い色の布が使われているから、当時の祠の主の赤き布の話は恐らくオレの幻想だろう。当時、夏になり「もう少ししたら盆踊りだよ」と触れ歩きながら賛助金を集めに回っている幾人かの人たちが我が家にやって来て、季節の挨拶やら世間話やらついでにオレ達子ども話やらしていた風景までが滲み出てくる。盆踊り当日になると紅白の幕が張られ、広くも無い広場の真中に棒が建ち、棒のてっぺんに針金を巻き付け 4,5 本の電線を放射状に張って提灯を結び付ける、提灯がぶら下がり、祠の前のひな壇にはスイカに瓜、茄子に胡瓜、トマトに桃、御神酒もカルピスも祀られていたように記憶する。昼間は年配の男女が長椅子に腰かけ話していた、土の上には蚊取り線香が揺らいでいた、夜になると提灯の中の裸電球が点り普段真っ暗な祠の辺りが煌々と明るく何十人の人だかり、昼間のシャツズボン姿が男は藍色で染められた浴衣、女は藍色の中に赤が混じるような浴衣姿になり、男はタバコをくゆらせ一杯機嫌、女もかいがいしく働きながらも大声で笑っている、男女の話など分からず皆が楽しそう華やいでいる“ハレの気分”を子どもながらに感じていた。唄い手の音頭が流れ始めると老若男女・善男善女の輪が出来、時の流れも忘れて緩やかに盆踊りが始まる、人々の舞いが続いた。旨いものを食べたかは忘れたが各自家から持ち寄って「どうぞ、どうぞ」と分け合って食っていたのだろう。戦後すぐの日本はまだまだ貧しい時代、白い米さえまともに食えない時代、野菜の漬け物、煮物、アゲに蒟蒻に豆腐等が主流で、肉や魚といった食材は高級品で少なかったと想像できる。

二十歳の頃、仲間と海水浴に行った瀬戸内海の小島で、地元の盆踊りを見付け輪の中に入れてもらって踊ったことがあった、その当時手足が自由に動いて盆踊りがすぐに覚えられた、地元の人たちと踊りを楽しんだ。右手を出して足を出して引っ込めて、手拍子を打ってまた手を出して、足を出して引っ込めて、くるりと首を回してというように単純なものだったのですぐに一緒に踊れたが、最近やってみようとしたら「手も足も出ない」てんで動かない、一体これはどうなっているのだろうと思ってしまいが、踊りの感が抜けてしまった今の現実です。

つくづく運動神経の無さ、鈍感さリズム感の無さ、を実感しているのがやり始めてもう 4 年目になるバドミントンの事「いやあ、上手くならない、皆さんのように打てない、飛ばない、音がしない、情けないねえ」「いや、大丈夫ですよ、最近、上手くなりましたよ、飛んでますよ、今やめたら駄目、75 歳まで続けなさい、体力が在るのだから、楽しんだらいいですよ」矢鱈（やたら）のリップサービスに、それじゃもう少し続けてみようかと心が騒ぐ今日この頃のオレです。

昔「ダンスをしませんか」と誘われてダンススタジオを覗いた事がある、2,3 人の絵の仲間と中に入ってみると丁度正装した男女がタンゴを踊っていた、目を見つめ合い抱き合いサッと離れ、足を差し入れぐっと身体を反らせる、皆さんご存知のセクシーな踊り、黒いエナメル of 皮靴、赤いハイヒールが印象的だけれど、それを目の前で見ながら「これはオレには無理だ」Y 子さんも「いや、ダメ、セクシー過ぎる」と醒めた顔「オレにはあんなスマートな革靴は似合わない」と紹介してくれた友人に断わりを言って出てきた。

現代の日本人はカラオケで歌は唄うけれど、踊らない、身体を動かさないと言う人がいた。踊る、身体を動かす、揺する、見せつけるというような行動が“神”や“霊”との交信、会話だという事を聞いた事がある。言葉で通じあうより身体を動かす、揺する、見せつける、手足を振る、頭を振ると続けながら心も体も陶醉し、異次元の物と接し交信会話を、異次元の空間に入り込んで交わり何かを発散し何かを吸い取り、なんだか離脱したような状態になり心身が浮遊する、陶醉の時が続く。これを書きながら「この話はオーム真理教の事件の時に聞いたぞ、奴等これを利用していたのか」とぞっとする。オレもリズムやメロディーを無視して、無手勝流に身体を動かしてみようか、飛び回ってみようか、何かが見えるかもしれない、何かがわかるかも知れない、ただ今日はやめておこう、夏祭りの連日のお酒で、身体が勝手に廻っているから。

祭りの日に阿波踊りの“連”が来て大いに踊りを見せてくれたのには興奮したね、夢中でシャッターを切った。

13-054 科学の話 070813

桜井邦朋著くなぜ宇宙は人類をつくったのか・最先端の現代物理学が解明した「宇宙の意志」>

夏祭りの何日間かを挟んで「この本は面白い、なるほど」と思いつつ、酒を食らった陶酔の日々が続き、読んだ内容が違ってないか、門外漢のオレが違った解釈をしていないか、科学者が人間の事を絡めて考えているのにオレが嬉しがり、先走り、本筋から離れ、自分勝手な解釈、興味のある処だけを抜き出している、というような事になっているかも知れませんが、桜井先生、皆様お許しを。

量子力学、相対論と何の事だかわからなかった先日までだけれど、やっと聞き慣れてきた言葉、その研究者が生命の事を、人間の事を、言葉の事を、人間が言葉を使って考えるという事を、というふうに話が進み、科学の話、物理・数学の話が人間の事を、人間が生きていく事を考える話になっていく。

50 歳代に母校高校の校舎を取り潰すので記念講義があった。学生当時「年配、熟年の先生」と思っていたがまだ若々しく「オレ達が学生時代先生方はまだ 20 歳代 30 歳代だったのか」と談笑しつつ、年上年下の熟年男女が高校生の生徒のイス・机に座って当時と同じように懐かしい先生の講義を受けた。物理は比較的わかりやすかった、先生の手振り身振り、物理の基本の基本、ニコニコ優しく解決してくれる、「なんで私がこの学校の教師になってしまったのか」というような思い出話も含めて、先生の講義の一時間が瞬く間に終わりいい思い出になった。数学は得意の科目だったのでもう少しわかるだろうと始まったが、等比級数と数学数式が出て、基本的にこれがこうでと始まっても何が何やら皆目理解できず「アカン」と匙を投げながら先生の顔を、黒板を、数字数式を見ていた、今読んでいる本を参考にしたら 16, 17 世紀に確立した分析解析の基本のひとつの考え方なのだけれども、数学数式になると思考が止まってしまったのには我ながら呆れ驚いた。

桜井先生著の中に“カオス”という言葉が出てくる。

◆ガリレオ、デカルト、ニュートン等の天才たちが、現代科学の研究における分析解析的方法を作りあげた。伝統的な分析解析的方法で、個々の現象が解決できた。

◆20 世紀になり量子力学、相対論が出て、こうした因果律的、あるいは決定論的行き方が必ずしも成り立たなくなった。ミクロの世界では不確かさが原理的に伴う。不確定性原理と呼ばれるものだが、これはあくまでも素粒子や原子・分子などミクロの世界においてだけ適用されるもので、私たちが日常経験するマクロな世界の出来事とは、別次元の事柄である。決定的な理論からはみ出してしまう現象の存在が明らかになった。“カオス”と呼ばれる現象だ。

◆物理現象で風が吹く大気が流れる、時間の推移の中で起こる、人の成長、思考の変化も、時間の推移の中で起こる。カオスと呼ばれる現象も時間の推移の中で起こる。時間の経過と共に発展する結末が一定せず、多様な結果を生じる現象、これをカオスと呼ぶ。

水面に形成された波動は、水面が風に曝された時などに生じる。この風の勢いが強い時には、波動の揺れ幅が大きくなる。その時、波動の波頭と波の底では、この波動の伝わる速さが違うので、波頭が成長し、崩れるという現象が起こる。この崩れ方には色々パターンがあり、どうなるか予言は難しい。この様に一定しない波の崩れ方などは、非線形現象と呼ばれ、理論的に予測するのが難しい。

なるほどこんな話を聞くと、サーファーも物理学者も「目の前の波がどう崩れるか」わからない。「明日の天気も」「オレの明日も」「あの木は、来年、何処に葉が付くのかも」「飛び回るカラスが、次にどの電柱に止まるかも」そうだこんな事柄にも分析解析式があるはずで、非線形現象が故に、式が少しずつずれる、そんなずれることにも分析解析式

があるが、また少しずつずれる。こんな少しずつが10の何十乗回も重なって計算もできず正解も無い、こんな正解が無い世界、混沌とした世界は刺激的で面白い、理解できない分面白い。

13-055 暑くて裸で失礼 120813

さあ明日から山だ、久々の山での長逗留、5泊もする、テントで5泊だ、お金を用意して、食糧の足りない分を買いに行って、服はあれでいいか、寒さはどれぐらいかと色々考えながら家族と話をしていて「今日は日曜だ」と言われてはっと気が付き吃驚するやら“きょとん”とするやら、こんなことが本当に多いねえ我ながら“きょとん”とすることが、脳の中の襞の一部分が少し伸びているのか、確実に何かがそこを滑り落ち欠落し、しかも通過している事がわからない、てなことをまたやってしまった。日を1日間違えていた、ずれている、頭の中がずれている。

今回の山は朝に車で大阪を出発し、新穂高温泉まで行き車を駐車する。新穂高温泉には大きな駐車場があるが行楽シーズンにはたくさんの車がやってくる。温泉好きな人たち、ゴンドラに乗ってアルプスの壮観景色を見たいという人たち、スキーの人たち、そして我々のような登山客、此处は登山口のターミナルのひとつ、穂高、槍、笠、双六そしてそれらを通ってもっと奥に進む人たちで車がいっぱいになる。駐車場で登山の恰好に着替え、少し先の“わさび平”で幕営だ。翌日は笠が岳の麓を“鏡平”から“双六”に上がる、予定では双六岳を超えて三俣小屋まで行くというのだけれど、テントと食料を担いで7,8時間も歩けるかと心配しつつも届かなければ双六で泊まればいい、双六にもキャンプ場があるし、今回はのんびり山、がつつ歩くことも無い、といいつつ山行予定は“三俣”で2泊、次に“双六”で1泊、そして帰阪となっている。最近では体力不足なので80Lの大型ザックを担いで登るのは3時間が限度、バテてて翌日に応えるので、4,5年前から40Lの小さいザックを持つ事にし、中には入らないテント等は紐で結びつけている。測っていないので分からないが、重さは80Lも40Lも変わらないのかもしれないけれど、オレの中の気持ちの問題なのか40Lを担いでいると、昔のように長い時間行動できる、平気ではないがなんとか行動できる。今回も40Lに詰め込んだが6日分の食糧はなかなか量が多い。夏のこの季節“わさび平”ですでに標高1400Mだそうで、稜線に上がるとアルプス1万尺、3000M近い山々だ。昼間の晴れているときは日照りで大阪とそう変わらない暑さだろうけれど風は冷たく朝晩はぐっと冷えるだろうと想像すると下着の選択に苦労するが、荷が重いと歩けない。食料も現地の小屋で食べることも考えても、インスタントラーメン、アルファ米、乾燥野菜、パン等と軽い物を中心に食の楽しみを犠牲にしても、リュックに詰める荷は徐々に重くなっていく。

8月中旬に入り本格的な暑さがやってきた。アトリエは広さ高さを誇る半面、暑さ寒さに弱いという弱点が若い頃には苦にならなかったが、ストーブ1台の厳冬期は涼し過ぎるし、扇風機数台の今の時期は暖か過ぎる。夏は半ズボンだけの上半身裸で暮らしている、アトリエで絵を描いている、そのまま階下で飯を食っている、一日中そのスタイルでいると呼び鈴のピンポンが鳴って裸で人に会うわけにもいかず、シャツを探すのに右往左往しなければならないことが幾度もあるので、シャツはここと決めているがそこに在った例なしである。

今年になって河原でも上半身は裸になっている。何時の日か「帰りの食糧を買わねば」と思いつつシャツの予備が無い、夏の暑い時に走るとシャツが絞れるぐらい汗が出る。建築職人の筋肉男子が大汗をかきシャツや上着を濡らして弁当や茶を買っている姿はそれなりに恰好がいいが、オレがそんなベタベタのシャツを着て店に入るのは如何なものかと思案の末シャツを脱いで裸で走った、以前から裸で散歩しているおっさんを何度か見かけ「ええい、見苦しい」と思っていたが、自身がその格好になってみると爽快、気持ちがいい、快適である事を発見。シャツを脱ぎタオルと共にズボンのバンドに掛け、尻のポケットにスポーツドリンクのボトルを入れる。もはや皆さんの様にはスタスタとは走れない。若いアンチャンが今風なジョギングスタイル、七部丈のスパッツの上から半ズボン、シャツも見るからに早く走れそうなデザイン、靴にまで色が付いてきた、若草色、オレンジ色の軽快そうな靴、こんな河原に来てまで若者はお洒落である。亡くなった阪口さんが「岡村さん、山では今風の恰好しないでくださいね」と言っていたのを思い出す。当時も今もオレのスポーツスタイルはお洒落なデザインとは程遠い、とは言え坂口さんはお洒落なセンスのいい建築デザイナーだったし、オレは人も驚くカラー使いの絵描きなんだけれども、このギャップは何なのだと苦

笑。

カンカン照りの表現にふさわしい毎日、夕方 4 時頃になると夕立が降るかも知れないという雲ゆきになってくると少し涼しくなるので出かけるようにしている。雨はさ程降らないので安威川の水量は少なく透明な水がさらりと流れている。下水処理場の排水溝辺りにやって来ると多少黒ずんだ水が混じり川の水量が増え止まったようにたゆたゆとした流れになってくる。常連の亀、鷺、鴨、鳩、カラスは勢いがいい。バッタと芋虫、蝶にトンボも何時でも居る。

13-056 北アルプス 180813

美しい風景を見た、この風景は絶景、壮観、地球は綺麗だとしみじみ思う。8 月中旬でも山の処々に積雪の塊が残っている、地球が抉（え）ぐれ盛り上がり、切り立って山また山、その間に深い谷また谷、山の斜面に低木が夏の日差しで今を盛りに緑色を恣（ほしい）ままにしている、処々に雪の白色、ついでに土と岩、これは下界では見られない絶景だというのがお分かりでしょうか。10 日前にはもっと雪が多く、20 日前にはそれよりもっと多く雪が残って、白色と緑色の帯はよりすごい、何に例えるかとふと思ったのが海に居るシャチを想像した。後 10 日もすれば雪のほとんどが消えるけれども、次の雪、来年の積雪となる雪が 9 月 10 月の声を聞くと降りだすので、この辺りの山々のてっぺんは雪が無い季節は 8 月 9 月の短い間だけだそうだ。8 月の中旬お盆の頃の日本列島は猛暑極暑の季節だけれどもアルプス一万尺、3000 メートル級の山々は風は涼しく、テント生活では朝晩はダウン防寒具は欠かせないという。「なんと贅沢な、なんと快適そうな、我々は汗水たらしヒーヒー言っただけの下界の夏を過ごしていますよ」と言われそうですが、日中は同じように暑くと言っても 15 度は温度が低いかと思いますが、荷を担いで登り下り大汗が出るし、日照りはきつい、ジリジリ太陽が照りつける、360 度遮蔽物のないてっぺんではみるみる内に肌が焼ける。テント場にぎよっとするように黒い青年が数人いた、黒人のような肌の色を見て「オレはまだまだたいした事はないね」と安心。

いつも行く山は人の行かない処、所謂マイナーコースの山に連れて行ってもらうのだけれども、今回はノーマルコースに行った。山で“表銀座”“裏銀座”という言葉があつてと言いながら我ながら怪しいと思い今調べ直した。“表銀座”は槍ヶ岳・常念岳・大天井岳（おてんしょ）・燕岳（つばくろ）で“裏銀座”は槍ヶ岳・縦沢岳（もみさわ）・双六岳・三俣蓮華・鷲羽岳・水晶岳・野口五郎岳・烏帽子岳となっている、よく知っていたつもりだったが全く間違えて覚えていたと思いながらも、オレは全部の山に登っている、楽しかったね。今回の山は裏銀座と呼ばれる人気コースの一部双六岳・三俣蓮華・鷲羽岳に登ったことになる。何時ものマイナーコースでは、ほとんど人とは会わないのとは逆で、お盆休みという事もあつて、よくまあこんなにたくさんの山愛好家がいるものだと思われ、たくさんの人が登り、降り、山を楽しんでいた。自分の年を忘れて、よくまあこんな年配の方がと思える単独登山の男性が一步一步ゆっくりゆっくり確実に登っていた、そういう方を何人か見た、恐らく昔の山岳会出身の方で、もはや仲間のほとんどがリタイヤされたのかな。「いつの間にこんなにたくさんの若者登山愛好家が増えたのだ」と思えるぐらい 20 歳代 30 歳代の男女がお洒落な服装、恰好いいリュック、見た事も無い装備と山の世界も変わってきているのだ。何時もは中高年登山者と揶揄されるように 50 歳代 60 歳代ばかりの人が多かったが若者の出現は嬉しい限りだ。

出かける前に夏の長丁場、たくさんの食糧を持っていかなければと思案し「野菜はどうしたら持っていける」と山仲間のトミーに問い合わせたら「ジッパー付きビニール袋に野菜と保冷剤を入れ空気をなるべく抜いたら、夏でも何とか 3 日ぐらいは持つよ、何日かは腐らないよ」と聞きキャベツ、セロリ、ピーマン刻んで持っていって、これらは重宝した。日持ちがすると言う事ではキャベツは塊の方がいい、乾燥ワカメ、乾燥ネギ、インスタント汁物に湯を入れるとなかなかいい。昼間の時間に小屋の軽食を利用するのもいい、ラーメン、うどん、カレーライスぐらいしかないし値は下界の倍近くするが荷の事を考えればいい、缶ビールは 500 円もするので強い酒を持参するようにしている、今回も 25 度の焼酎 1.8 リットル紙パックを持参した、これは重いが、これは譲れないとは大酒飲みのおっさんのようだけれど最近では弱くなって酒の飲み方も酒の量も子犬のようになってしまった。

山から降りて 500 円の温泉に入った、気持ちがいい、大汗をかいた、ほとんど着替えもしなかった、何と気持ちがいいと快適を満喫したが、温泉から出て着ていた物をたたみながら「ウエエ、スゲエニオイ」と絶句。同行の紳士がたくさんの人が行き交う山道で便意を催し「漏れてしまった、リュックの底の傘を出し広げ人の目から隠れズボンもパンツも履き替えた、ペットボトル 1 本で尻を洗った、汚れものはジッパー付きビニール袋に入れた、お待たせしました」とたばこを吸いながら笑っておられた。これも「ウエエ、スゲエニオイ」だろうね。信州は何処に行っても温泉があるので「うらやましい」と家族に言われるが、オレにとってはただの風呂なり。

13-057 莊子 220813

野村茂夫著<莊子>最初の解説に『莊子』33 篇、65000 字は、ひとりの人の、一時期の手によって書かれたものではない。恐らくは紀元前 4 世紀後半に、そのうちの核となる部分を書いた莊周という人物がまず存在し、その後、莊周の思想に共鳴する後継者たちが、徐々に新しい部分を莊周の名を借りて付け加えていったのであろう。<中略>莊周の思想の中心であるとされるものを挙げれば、それは齊物論篇（せいぶつ）を中心として展開される、万物斉同（せいどう-等しく同じ）の思想であろう

万物斉同とは、この世界の全ての存在・現象、それらの間には優劣の差はなく、存在し現象としてあるからには、あらゆるものが等しく価値を持つとして、すべてのもの、事柄を斉同視する一ひとしく認めようとするものである。<中略>人間は彼（あれ）と是（これ）、善と悪、美と醜など、様々な判断を下すが、果たしてその判断は絶対的なものであろうか。『莊子』はこの問題について、多方面から繰り返し言及している。

これを読んで目からうろこの感、というのは、なかなか面白い事を言う人が 2500 年前の中国に居たものだと思っていたが、たくさんの著作があり何が何やらわからない、どれを読めばいいと迷うが、好きなものだけを読もう。

◎<夢に胡蝶となる>齊物論篇

輪足は夢の中で胡蝶になった。ひらひらと楽しく舞い飛ぶ胡蝶であった。自分でもうれしく気分がぴったり合っていた。莊周という人間であることなどすっかり忘れていた。ところがはっと目覚めると、これはしたり、自分は莊周ではないか。しかしどうもよくわからないのだ。わたし莊周が夢の中で胡蝶になっていたのか、あるいは実は自分は胡蝶であって、それが夢見て莊周になっているのか。莊周と胡蝶とは確かに形の上で区別があるのだが。これが物事の変化というものか。

◎<物は彼（あれ）に非ざるは無く、物は是（これ）に非ざるは無し>齊物論篇、

道の話：本来、唯一真実の道が、どこに姿をかくして真の道、偽などが生じたのか。本来、対象を正しく表現するはずの言葉が、何に覆い隠されて正しい言葉、間違った言葉ができたのか、本来、道は何処にでも普遍的に存在するはずのもの、言葉はどんな場合でも対象を正しく表現するはずのもの。それがおかしくなったのは、道はつまらない成功を求める自己主張に、隠されてしまい、言葉は内容よりも、華やかな表現で自己宣伝をすることで、隠されてしまったためである。

（あれ）（これ）の話：いかなる物も彼（あれ）でないものはない、いかなる物も是（これ）でないものはない。同じ物でも、（あれ）の立場に身を置けば見えないが、自分の確認できる（これ）の立場に立てば、それを知ることができる。だから、一定の（あれ）というものがあるあるのではなく、それは（これ）というものに対して相対的に遠くあるから出現するのであり、（これ）もまた（あれ）があることにより生じるのであるといわれるのだ。これが、（あれ）と（これ）はちょうど一緒に発生する、という見解なのだ。しかしながら、このような現象は（あれ）と（これ）だけでなく、生と同時に死があり、死と同時に生がある。可と不可はちょうど同時になり立ち、不可とかはちょうど同時になり立つ。非定の立場に立てば、同時に肯定の立場が成り立つ事になり、肯定の立場に立てば、同時に非定の立場が成り立つ事になる。<中略>（あれ）と（これ）が対立を亡くした世界、これを道の枢（とぼそ一蝶番の軸-中心-しかけ）という。枢は中空の穴の部分に在って、初めていかなる方向へも窮まることなく応じうる。この道の枢、

すなわち心を空虚無新にしてこそ、肯定も一つの窮まりなき変転の一面であり、非定もまた一つの窮まりなき変転の一面であると、見ることができる。

道の境地：道の立場からすれば、全てを通じてひとつである。あるものが分裂することは、出来あがることであり、出来あがることは、壊れていく事である。しかし万物は、これらの出来あがる、壊れるなどの現象などを超えて、通じてひとつなのである。自分の知恵など用いず、平常心のまま心のままに委ねておく。平常心のままであれば、真の働きがなされる。真の働きがなされると、全てに通じる。全てに通じたならば、道を体得することができる。全てをよしとして肯定し、何故そうなのか意識しない。これが道の境地である。

13-058 山の不思議 240813

山を歩く、尾根道、稜線の上を歩くのはなかなかいい、360 度視界が開け、右に左に山と谷、青い空雲の流れ、膝ぐらいまでの低いハイマツが濃い緑に茂り、その間に草と小さい花、此処までいうとまるで桃源郷、別天地、何時もいい処に行っているねと言われそうだが、穏やかな天候の時はまさにそうですが、そうです気分は最高ですが、ポチポチ降ってくる、カラカラ雷が鳴り出す、きつい風が吹き出す、雨風、吹雪はいけません。いけませんとは言うけれど、天候の急変、特に昼を回るとすぐに山の天候は悪くなるのが常です。

普段でも山を歩いて「ころころ」と小石がころがる、絶え間なく落ちていると言うような処によく出会います。もし大きな石が落ちれば怪我どころではない、土ごと崩れおちれば土の雪崩で生き埋めになってしまう、激しい雨、土石流と絶えず起こっているのに「山が低くならないのか」と不思議に思っていたら、信州長野県の土地はどんどん隆起をしているようだ。

小井戸先生の HP より：北アルプスは、日本で 3 番目に高い奥穂高岳（標高 3190m）や 4 番目の槍ヶ岳（同 3180m）などを含めて 2500～3000m 級の峰が連なる日本有数の山岳地帯を形成している。北アルプスは富士山のような独立峰ではなく、全体として標高の高い山が 100km の規模で連なる山脈を形成している。北アルプスが低い標高をもつ理由は、全体としてどんどん上昇（隆起）しているためである。北アルプスの隆起運動はいま現在も継続している運動であり、中央アルプスも南アルプスも同じように隆起を続けている地域である。仮に年平均 1mm で上昇しているとするなら、1000 年で 1 メートル、100 万年で 1000 メートルとなる。100 万年という期間は地質現象としての最低時間単位と考えてよい。

鷲羽岳の直下に明らかに噴火の跡、火山の火口があり水が溜まっている、またその向こうには山肌が露出して草木が生えていない土色の山が続く。昔はこのきつい斜面をデカイリュックを担いで上り下りして通過した、縦走したのはいつの日か、もう忘れてしまったが、荷が重いと足の踏ん張りが利かず、リュックが岩にでも触れると体まで振られて「ややや」と恐い思いをする。一抱かえもあるような岩がごろごろ斜面に貼り付いている、こんな岩も小さい地震でも揺れたら崩れるかもしれない、ダンプカー状態になるかも知れないと思うとゾットする。「火口に降りてみよう」との掛け声で近づいてみた。すぐそこだと思ったがなかなか近づかなかったが、池の水はただ穏やかで 5 ミリぐらいの虫がたくさん泳いでいた。この辺りの火山、カールなどを調べるといろいろ興味深い事が出てきた。明治の登山黎明記まで三俣蓮華岳（2841）が鷲羽岳であったとか、明治以降名前を取り違え、今日に至っているようだ。驚いたのは 300 年も前に加賀藩の“奥山廻り”によって 1697 年（元禄 10 年）に「鷲ノ羽岳」の山名や地形が絵図にされているようだ。特に現在の三俣蓮華岳付近は、北アルプスのこの辺りは加賀藩政時代、三国境としての重要さから詳細に調査していたようだ。

中野俊先生 HP より：鷲羽池火口は美しい火口です。この位置から南東方向に 2km 以上流れた溶岩があります。放射年代測定によると、約 12 万年前に流れ出た溶岩です。これが、鷲羽池火口のあたりに火山が生まれた最初だと思います。

ただし、今の明瞭な形の火口はそんなに古いものではありません。鷺羽池火口ではもっと後にも噴火がおこっています。＜中略＞硫黄沢（鷺羽池火口と硫黄尾根の間では今でも高温の温泉が湧き出し、硫黄を含んだガスが何力所からもでています。鷺羽池火口のある火山を鷺羽池火山といいます。これは、鷺羽・雲ノ平火山（群）の一部です。鷺羽池北西の雲ノ平はもっと大きな火山ですが、この火山は鷺羽池火山よりも古いと考えられています。硫黄沢一帯での硫黄活動がさかんなことから、この火山群は生きている火山といってもいいと思います。

氷河に削られてできた凹地の代表例は、カール（圏谷）である。氷河に削り取られた岩塊は氷河の末端に運搬されモレーン（堆石）を形成し、氷河が消え去るとその中の凹地やカール底に水がたまる。氷河湖とか氷食湖と呼ばれる。

オレも 66 歳、昔のように元気は無くなった。何時まで登れるか。山は素晴らしいけれども、危険も一杯。

13-059 生野銀山 0813

＜白金も 黄金も 玉も 何せんに まされる宝 子に しかめやも＞ 山上憶良

歌われた白金とは、銀のこと、黄金は、金のことです。次の＜うりはめば＞の反歌だそうです。もうひとつの＜おくららは＞はオレが好きな歌です。一番好きなのが、その次の貧窮問答歌です。

＜瓜食（は）めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして愚はゆ＞

＜憶良らは今は罷（まか）一退出する）らむ子泣くらむ其も彼の母も吾（あ）を待つらむそ＞

＜風雑（まじ）り 雨降る夜（よ）の 雨雑り 雪降る夜は すべもなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒（かすゆさけ） うち啜（すす）ろひて 咳（しはぶ）かひ 鼻（び）しびしに しかとあらぬ 髭搔（か）き撫（な）でて 吾（あ）れをおきて 人はあらじと 誇（ほ）ろへど 寒くしあれば 麻衾（あさふすま） 引き被（か）がふ）り 布肩衣（ぬのかたきぬ） ありのことごと 着襲（そ）へども 寒き夜すらを我（わ）よりも 貧（ひ）しき人の 父母は 飢（う）ゑ寒（さ）からむ 妻子（めこ）どもは 乞（こ）ひて泣（な）くらむ この時は いかにしつつか 汝（なんぢ）が世（よ）は渡る＞

生野銀山を調べていたら、銀の説明に山上憶良の歌が紹介され、白銀、黄金の説明に使われていた。万葉集で山上憶良は恋愛の歌、相聞歌はなく、“貧者への溜め息”“子への情愛”“老い”を歌った歌が多いと解説氏の弁。今回の市の人権の会で生野銀山に同道した方の感想を次に添付します。

80 歳に、もう少しという歳の私が生まれたのは、生野銀山から 50 キロほど北に行った所でした。私が生まれた村の辺りでは、生野銀山町はゆかりのある町でした。というのは、生野銀山町は、もっと昔も、当時も、鉱山として栄え繁栄し、多くの労働力、人が集まっていました。私の生まれた当時、但馬地方の人達が、交通の便が悪い時代に、夫婦で生野銀山町に、働きに行っていたようです。多くの人が徒歩で、牛馬が引く荷車で、生野銀山町まで行っていたようです。私は 20 歳前に奈良で、次いで大阪で、仕事を覚え働いてきました。子どもの頃から、生野銀山町で働いた事のある人たちが、周りに何人かいたので、金・銀・銅と言った“お宝”“重要な金属”がどのように採掘され、どのように大変な作業を経て、金・銀・銅になっていくか、流通されているのか、と言う事などをよく聞かされました。現代の人達も、そういう事を知ること、原点に戻り、大変な作業・苦勞をしている人の事を思い、人間としての生き方を、考えてほしいと思った次第です。

8 月下旬、二日ほど雨が続き、それまで上半身裸でしかも遠く離しているが扇風機まで回して寝ていたのが嘘のように肌寒い夜になってきた。ほとんどの人が「クーラーを一晩中、点けている」「タイマーを使ってエアコン調整しないと眠れない」と人それぞれ猛暑の夏を過ごしているようだ。アトリエで立っているだけで汗が出てくるような状態では、ちょっとお洒落な服を着てみようとは思えない、もう何でもいい、汗に濡れたら着替え、なるべく簡単な、洗いやすいものと、服装には無頓着になってし待って、何を着よう、何がいいなどと夏の間はいつも考えられない。その朝は

兵庫県中部に大雨洪水警報が出ていたが、予定通り観光バスが来て出発した。生野銀山の前は何度か素通りした、と言うのは、村上君の工場が和田山に在りそこへは百回ぐらい通った折、何度かこの道も通った。一度は門の前に車を停めうろうろした事もあったけれど、今の様に観光化され駐車場が整備され、賑わっていたような記憶が無い、ただぽつんと締められた門、鉱石を溜める池が在ったように記憶している。鉱山の坑道はひやりと肌寒い、13度と書いてある、中は堅そうなほんまものの石で、機械の無い時代に鎚（つち）と鑿（たがね）でコツコツ時間をかけて掘った穴が蟻の巣のように縦横無尽に点在している。其処に明治以降の近代機械、工具が入り込み平安時代から最近までの時間が凝縮している。

13-060 釈先生 310813

相愛大学の釈先生の話をつまみ映像で見た。生き方、考え方とその話をちらちら聞きながら「いいことをいう」「ちょっと違う」と共感なり違和なりを感じながら“素晴らしい人”なので思い出すままに紹介します。

◎原子力発電は今の時代にそぐわない、発電をするという技術、発電所を作るという技術はできているが、事故が起きた、放射能が漏れた、発電所を解体する、使用済み燃料を破棄する、と言うような技術はまだまだ確立していない。自然界に対して、永い将来に対して、責任が持てない事はやめたほうがいい。日本は世界に向かってこれから原子力発電所の解体を、その技術を発揮すればいい、と言うような意見だった。思い出せば福島事故の後、もう何十年かは人が住めない、いや福島だけではなくもっと広い範囲で人が住めない、と言う話を何度も聞いた。実際に住んでいた所から避難退避をした人、人っ子ひとりいない村の映像も見た、未だに放射能の高い処はまだまだその現実が続いているようだけれども。それはたかだか A さん B さんとその家族仲間の数万人だけの人たちのことであって、それ以外の何百万人、何千万人の人々にとって、日常生活を日々の営みを考え、想いは自身の事、自身の家族の事、自身の仲間の事、より快適により便利により安定的にと選択を迫られ「二度と事故は起こらない」「効率よく安定的な生活の為に」「外国にも原子力発電所を輸出しよう」と徐々に止まっている原子力発電所が再稼働しそうな昨今の情勢だ。オレも色々な知識をもらいながらも、拳を挙げて「やめろ」と言えない不甲斐無さ、白々しくも便利生活、デジタル生活を謳歌している。

◎靖国神社の問題は、靖国神社自身が、靖国神社をどういう方向に持っていきたいのか、どういう神社にしたいのか、をはっきりさせた方がいい。明治以降色々な経緯があり、世論も報道も政治もそれぞれの立場から靖国神社と接し利用してきた。「我が靖国神社はこういう神社で、こういう人を祀っている、こういう人に、こういう方法で参って欲しい」と言って欲しい。と言うような意見だった。

最近目に見えない力、気配、霊と、何かこれはいいものなのではないのかな思ったりもするが、まだまだ寺院・神社・教会などと言うと近づきたくない場所と思いこんでいるオレなので、靖国、国に命を捧げた人々と雖もピンとこない、と言うより、死者を祀る、死者を想う、と言う事は当然のことで、どんな人も、残念ながら死んだ人、悔しくも殺された人、戦争で亡くなった人、犬死にした人、と言うけれど死者に区別は無いのでは思っている。

◎嘘をつきますか？出家生活は？

「勿論嘘をつきますよ」と釈先生が飄々と。「出家とは社会から、人間関係から自身を断ち切り、宗教だけという狭い世界に入り込みひたすら宗教の事を考える、奇進、乞食で生きてゆく」「日本ではほとんどが在家出家者、帯妻し家庭をもち、地域社会に政治に関わって永年成り立ってきた。日本人には出家というスタイルがなじまないのかもしれない」とおっしゃる。

ビルマ・タイ・ブータンと言うような処のお坊さんは、帯妻も家庭も無く寺院に住んでひたすら宗教活動をしているのに比べ、日本では昔から地域の人々に、政治に、中央政権に関わってきた社寺仏閣が多い。ところが先日来オレの

中で名前が出てくる人たち、放浪、乞食、餓死、行き倒れなんていう芸術家、思想家、宗教家を知っているが、南の方のアジアにはこんな人たちがたくさん居るのかも知れない。今の人間生活、社会生活を断ち切ってプイと何処かに行ってしまう、あいつはいつの間にか姿を消してしまった、その後は何の音沙汰もない、プイと現れ大きな足跡を残して、又プイと居なくなってしまった、とか地縁血縁を断ち切って魔界の世界に入ってしまった、知らないところに行ってしまった、“なるようになるさ”と呵々大笑、開き直ってか、それとも何か重いもの、何かとてつもなく悲しいもの、から逃れるために出奔していった、何食わぬ顔で、新しい処で新しい世界で飯を食っているのか。若い頃、文章であれ絵であれ、その善し悪しがわからなかった頃、そのひとの伝記なり解説なりを垣間見て、こういう生き方の人だったのか、こういう考え方の人だったのかと作品を鑑賞する前に伝記を愛でていた自分がいた、作品を見る目が無かったと言う事は恥ずかしい限り。